

毎日新聞社の「学校読書調査」における読書資料の傾向

澤 欣希

読書調査 (survey of reading) とは、「一定の集団を対象として行う読書の興味、活動、経験、環境などに関する調査」である (図書館情報学用語辞典、第5版、丸善出版、2020.8、p.173)。毎日新聞社は、1947 (昭和22) 年以降、全国の成人を対象として「読書世論調査」(第1回調査の名称「出版世論調査」) を実施するようになった。さらに、1953 (昭和28) 年8月の学校図書館法の公布、および、翌1954 (昭和29) 年4月の同法施行を機に、1954年以降、全国の小・中・高校生 (小学生は4年生以上) を対象とする「学校読書調査」を開始した。この「学校読書調査」は、1963 (昭和38) 年の第9回から、毎日新聞社と全国学校図書館協議会 (全国 SLA) が合同で実施してきた。長年、「読書世論調査」と「学校読書調査」の報告書は、毎日新聞社から継続刊行されてきた。しかし、COVID-19 流行の影響等を受けて、2019 (令和元) 年実施の第73回読書世論調査・第65回学校読書調査を最後に、毎日新聞社による報告書の刊行は終了した。「学校読書調査」は、2020 (令和2) 年度中止、2021 (令和3) 年度の第66回学校読書調査は毎日新聞社と全国 SLA で合同実施 (報告書未刊行)、2022 (令和4) 年度以降は全国 SLA のみで実施されている。「学校読書調査」は、約70年にわたって調査が継続され、児童・生徒の読書に関するデータの蓄積は貴重なものである。しかし、「学校読者調査」のまとめは、第25回学校読書調査 (1979年) の際に毎日新聞社が実施したが、その後、十分には行なわれていない。

そこで、本研究では、毎日新聞社の「学校読書調査」の報告書 (全65回) を対象として、児童・生徒が読んだ本の変遷をまとめ、児童・生徒の読書傾向の変化について分析・考察した。研究方法は、文献調査、調査の報告書の内容分析を用いた。

研究の結果、以下の事柄が明らかになった。

- ・小学生は、書籍読書量の記録が始まってから不読率は10%前後で推移し、読書冊数の分布は10冊以上の比率が約40%を占めている。中学生は、2000年頃までは不読率が50%を超えて「読書離れ」が起きていたが、その後劇的に改善し、現在では10%台まで下落している。高校生は、中学生以上に不読率が高く、90年代後半で80%近くの不読率であった。2000年代に入って20ポイントほど減少するが、中学生ほどの改善は無く、現在も不読率は55%に上る。
- ・1960年代から言われた「子どもの読書離れ」現象は、現時点では高校生にしか見られない。小学生には「読書離れ」と呼ぶべき現象が起きておらず、中学生の「読書離れ」は2000年代に入って劇的に改善している。
- ・小学生 (4～6年生) が「5月1カ月間に読んだ本」は、1955～2019年の64年間を通じて、男女ともに伝記が上位にきた。男子が読んだ伝記は、エジソン、野口英世等が多いが、女子の場合は、ナイチンゲール、ヘレン・ケラー、キュリー夫人等が上位を占めていた。
- ・小学生の男子は、江戸川乱歩シリーズ等の推理小説、動物・昆虫に関する読物・図鑑もよく読まれていた。一方、小学生の女子は、『赤毛のアン』等の海外の児童文学が多く読まれてきた。
- ・中学生が「5月1カ月間に読んだ本」は、1955～2019年の64年間を通じて、伝記が少なくなり、推理小説や小説が上位にきた。男女が読んだ推理小説は、シャーロック・ホームズシリーズ、怪盗ルパンシリーズ、江戸川乱歩シリーズであった。女子の場合は、赤毛のアンシリーズの小説もよく読まれている。
- ・中学生は、小学生と異なり、夏目漱石 (坊っちゃん等)、宮沢賢治 (銀河鉄道の夜)、芥川龍之介 (羅生門) の小説が読まれるようになった。
- ・毎日新聞社の「学校読書調査」は、1954年以降の小中学生の読書状況を調査し、貴重なデータを蓄積してきた。毎日新聞社の「読書世論調査」の調査再開、毎日新聞社と全国学校図書館協議会による「学校読書調査」の共同調査の再開、及び、報告書の刊行再開が強く望まれる。

(指導教員 大庭 一郎)